

それらのフォーミュレーションの統合、およびチームアプローチや身体ケアの場面での応用についての検討が行われている。

本書が主に依拠している英国心理学会の定義によれば、心理学的フォーミュレーションとは、「その人の困難についての臨床的理論と結びついている仮説であり、それへの介入をガイドするもの」である。つまりフォーミュレーションとは、個別のケースの特徴を一定の理論に基づいて把握し、そこから介入の道筋を考えていくことである。本書で提示されるフォーミュレーションの理論は、認知行動療法、精神力動的心理療法、システム論的アプローチ、ナラティブ・セラピー、社会的不平等論、パーソナル・コンストラクト心理学である。それらの記述では、それぞれの学派・立場の特徴ばかりでなく、それらの間の共通点と対立点が明瞭になるように工夫が凝らされている。これは、学派を越えてクライアントの理解を深めるための共通プラットフォームとしてのフォーミュレーションの可能性を示そうとする試みだということができる。

提示されているケースは、単純には扱い得ない発達期の問題、家庭内の軋轢、社会文化的要因などが折り重なっているクライアントである。他方、理論の面では、問題を捉える視点が相当に相違しているものが取り上げられている。例えば、ナラティブ・セラピーでは、個人のナラティブが中心になるのであるが、システム論では家族や社会が問題にされることが多い。しかしケースが多面的に捉えなければならないケースであるせいか、それぞれの学派・立場の定式化では、互いが矛盾することがほとんどない。むしろ視野が広がって、柔軟に組み合わせや取舍選択ができるようになるようである。さらに、理論的な統合では、類似の視点が理論的に重ねられることによって理解の道筋が広げられているし、実践的には介入の幅が広げられて、それぞれの介入が相乗的に効果を生じていると感じられる。

本書（第2版（2014年））の第1版（2006年）からの変化には、今後の発展の方向の手掛かりが認められるように思う。本書の構成は、基本的に第1版と同じであるが、ケースフォーミュレーションを行う理論的な立場が二つ増え、応用の場面も身体ケアの場面が加えられている。この二つの発展の方向は、今後も重要だろう。まず、理論的な立場を加えて検討することは、容易でない課題であるものの、本書

ケースフォーミュレーション

6つの心理学派による事例の見立てと介入

ルーシー・ジョンストン、

ルディ・ダロス編

大野 裕監訳

坂戸美和子監訳・訳

中島 孝、前田初代、浅田仁子訳

金剛出版、A5判398頁、4,950円、2024年12月刊

（西ヶ原病院）林 直樹

本書は、臨床心理学および心理療法におけるケースフォーミュレーション（定式化）のあり方を広い視野から検証し、その発展の方向を探ろうとする著者たちの試みがまとめられている書籍である。ここでは、二人のモデルケース（ジャックとジャネット）に対して、6つの学派もしくは立場から提示されたフォーミュレーションにおけるそれぞれの特徴、そして互いの共通点や相違点の検討が行われ、さらに

においてシステム論的アプローチとして（他のシステム論的視点に繋がるものとして）社会構成主義のものが論じられているのは、一つの範例と見ることができる。われわれは、たとえそれが隘路であっても、さまざまな立場へのアクセスを求めなくてはならないのだろう。次のさまざまな臨床場面への応用は、現場で強く必要とされている課題であり、今後とも積極的に議論され、実践されるべきである。

以上述べたように、本書はケースフォーミュレーションの現状を多角的に概観し、その豊かな可能性と今後の課題を指し示している。わが国において広く読まれるべき重要な著作であると評価できる。本書の出版に尽力した人々の労を多としたい。

原書：Lucy Johnstone & Rudi Dallos (Eds) :
Formulation in Psychology and Psychotherapy :
Making sense of people's problems Second Edition.
